

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2015年9月 NO.187



[もくじ]

- 2～3 笑いの力で高知を元気に…花の家こなつ
- 4～5 タテからヨコへの文化政策…河村章代
- 6～7 コミュニティカレッジ「土佐志民大学」開校！…尾崎昭仁
- 8～9 歌のお話…永原順子
- 10～11 続・素人のハチ飼い…成沢忠
- 12～13 高知市文化振興事業団6月～8月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

笑いの力で高知を元気に

花の家こなつ

自己紹介

社会人落語家の花の家こなつと申します。関西大学在学時より、「大好きな高知を笑いの力で元気にしたい」という想いで、所属していた大学の落語研究部の仲間や地元の方の力を借り、県内各地で落語を披露して参りました。卒業後、就職と同時に高知に帰郷してからも、休日を利用して県内各地の老人ホームや病院、公民館などで落語を披露させて頂いております。

以下、拙文ですが、貴重な誌面をお借りして、私の想いを執筆させて頂きます。

落語に興味を持ったきっかけ

まず、私が落語に興味を持ったきっかけですが、大学入学から卒業までアルバイトをしていた大学前の喫茶店が落語部の行きつけで、そこで落語部員と関わりができました。

大学一回生の十二月、初めて落語部の寄席を見たとき、同年の

女の子が、手元に台本もないのに誰の助けもなく、一人で二十分も舞台で喋り演じ続け、客席の笑いを取っている様子に感動しました。そして同じ日の寄席終了後、先述の私のアルバイト先での打ち上げの様子を見てみると、その日の自分の舞台に満足し達成感に満ちた様子で陽気にお酒を飲む人、悔しくて泣いている人、それを叱咤激励する先輩…。部員同士が切磋琢磨している様子を見て、大学時代にこんな打ち込めるものがあるのかと、うらやましくなりました。

落語部に入部

そして、大学二回生の四月、気が付けば私も落語部に入部していました。入部の動機は、大勢の人前でも自分の想いを堂々と話すことができるようになったから、でした。

入部前は、落語というと文化系のおとなしいイメージでしたが、実際飛び込んでみると、今年で創部五十二年を迎え、六代目桂文

枝(前三枝)師匠が設立に関わっていたという伝統あるクラブで、まるで体育会系クラブのようでした。落語はお腹から声は出すし表情もコロコロ変えるし、身振り手振り、喜怒哀楽の感情を込めてやるもんですから、汗だくです。まさに「落語はスポーツ」でした。

また、NHKドラマ「ちりとてちん」などによる落語ブームの影響か、女子部員数も男子部員数と同じくらいまでに増え始めていましたが、(伝統的に「女を捨てろ」、「恥を捨てろ」の方針で、舞台上緊張しないようにするためにも、大学構内の一般学生が往来する体育館などでゴザを敷いて正座をして一人で練習したり、先輩に稽古をつけて頂くのが伝統でした。入部当時は恥ずかしくて逃げ出したかった私も、慣れとは恐ろしいもので、一年も経てば通行人がいても平気でネタ練習に集中できるまでになりました。

落語の魅力に気付く

そうして、入部から半年後の十月に迎えた初舞台は、地域のお年寄りの憩いの集いでした。約五十



名の前で、頭は真っ白。台詞もとぶし散々な出来でしたが、帰り道にあるおばあちゃんから呼び止められ、「こんなに笑うたの久々で元気になったわあ、ありがとう!」。このおばあちゃんの一言に心打たれ、落語の魅力に気付きました。それは、座布団一枚あればいつでもどこでも落語を披露し、目の前にいる人を笑顔にできるということです。落語は人を元気づけられる素敵なツールだと初めて知りました。

そしてもう一つ、落語の意外な魅力、落語で地域を面白くし盛り上げることができるという実例を知りました。

大阪府池田市は落語にゆかりがある町で、落語で町おこしに取り組んでいます。ここでは、商店街の空き店舗を活用して寄席を行い、寄席終了後は、舞台を降りたアマ

チュア落語家が寄席に来ていたお客さんを率い、商店街ツアーをするというものです。アマチュア落語家がマイクを握り店主と軽快なやり取りをし、お客さんの笑いを誘います。それが商店街の店主とお客さんとの繋がりができるきっかけになっていくようでした。

その他、池田市のある歯科医院でも、医院の待合室を会場にして寄席を開くという面白い取り組みがあります。アマチュア落語家が落語を披露したあと、歯科医師自らが着物を身に纏い、虫歯予防の話をします。歯医者「虫歯が痛くなつてから泣きながら行く怖い場所であるというイメージから、予防をしつかりして楽しく通える場所にしたい」という歯科医師の想いがありました。寄席の効果で患者さんは増えたかどうか質問させて頂いたところ、目的は患者さん増ではなく、地域に貢献すること、とのコメントを頂きました。

大阪のように、高知でも落語で人や町を元気にしたい

高校生の頃から、帯屋町を歩く度に、(現在は再開発が進み段々賑わいを取り戻していますが)人通りも少なく活気があまりないことが寂しく、大阪へ行って心も片隅で高知の町が気になっていました。そんなとき、落語で賑わう

池田の町を見て、高知にもこの賑わいを持って帰りたいと思ったことと、また、大好きな高知への恩返しの意味でも、高知の人たちを元気づけるお手伝いがしたいと思つたことから、大学二回生の三月、初めて高知で寄席を企画しました。大阪の仲間や地元の方の力を借り、手作りの寄席でした。お客さんからの「面白かった」「また来たい」との反応に手応えを感じ、県内での落語会は卒業までに計七回企画しました。回数を重ねるごとに、応援してくださる方が増え、最初は来客数約五十名だったのが、最近では百、二百名までになりました。継続は力なり、を強く感じます。

落語をしている理由

私が社会人になつても落語を続けている理由は、「笑って元気がなつたよ」と喜んで頂けることが何より嬉しいからです。例えば、ある老人ホームを訪問した際、普段全く笑わない、話しかけても反応を示さないお年寄りが、落語を聞いて思いっきり声を出して笑っていたというお話を聞いたときなどは、自分も微力ながら人を元気づけることができているんだと嬉しくなります。そしてやはり何と言つても、仲間と寄席を無事終えたあとの打ち上げのお酒がおいしい



いから。実はこれが一番の原動力だったりします。大人になつても泣いたり笑ったり、青春していきま

このように、私が落語をしている理由も色々ありますが、最終的な理想形は、定期的に地域で寄席を開き、地域の繋がりを作りたいというものです。そう思つたきっかけは、大学の講義で「無縁社会」という言葉を知ったことでした。人間関係が希薄な昨今、孤独死してしまふ一人暮らしのお年寄りの存在や、子育てに追われ、近所付き合い合も希薄で気軽に相談できる人がおらず、極端な場合、我が子を虐待してしまふまで追い込まれてしまふ母親の存在など、放つてはおけない問題だと感じました。私自身、大学時代に大阪で一人暮らしを経験し、話し相手がないことや孤食の寂しさを実感し、病

気になつたときには大変心細く感じました。

このような経験を通してふと思いついたのが、地域で定期的に寄席をすることでした。そこで、一人暮らしのお年寄りが、寄席に来ている子どもと遊んで癒されたら、そのお母さんは、育児から少し解放されて息抜きができる。そんな光景が思い浮かびました。

この、地域での定期的な寄席の開催を実現するには、まだまだ自分に余裕もありませんが、長期的な目標として、いつか叶えたいと思つています。

はなのやこなつ

高知市出身

大阪府吹田市にある関西大学在学中に、文化会「落語大学」(落語研究会、いわゆる落研)で活動。在学中より「高知を元気に」をモットーに、県内各地で大学の仲間とともに落語を披露してきました。就職とともに帰高し、社会人三年目の現在も、月に一度位のペースで活動中。また、昨年六月には、笑いヨガ(笑いの体操とヨガの呼吸法を組み合わせたもの)のリーダーの資格を取り、落語とともに活動中。

タテからヨコへの文化政策

河村 章代

四月から二年間、研修という形で高知県庁に勤務している。あれ？と思う方にご説明いたしますと、元々、筆者は高知県文化財団の職員として二十数年前に採用され、現在（今年度から二年間だけ）は半分県庁職員、半分財団職員という身分である（ああ、ややこしい）。現在の業務は、ざっくりいうと「高知県の文化振興事業」、具体的に、高知県文化広報誌「とさぶし」の発行業務（編集自体は外注）、後援申請の対応など諸々。その中で、年に二回ほどであるが、市町村文化行政担当者連絡会というものがある。これは、県内各市町村の文化行政担当者を集まっていた、情報交換や交流をはかろうというものである。福祉をはじめとする他の行政分野では、市町村

の担当者との連絡、交流は比較的にあるのに、文化関係でないのはいのかな？ということでも昨年度から始めた新しい業務である。昨年は、初めてのこともあり、助成金の情報提供などを中心に行った。筆者も高知県文化財団職員の立場で文化事業助成金や芸術祭のKOCCHI ART PROJECTS（以下、KAP）助成事業などの説明を行った。今年も、助成事業の紹介もいくつか、KAP助成事業の報告や、地域資源を活用した事業の報告などをメインに、東部、中央部、西部と県内四カ所で開催した。各市町村の文化行政を担当する職員や県地域支援企画員が参加し、様々な意見が出された。その中のひとつ、高知市五台山の竹林寺を会場に開催した回では、これからの「自治体の文化政策の



ありよう」のヒントとなるような視点を得ることができた。そのことについて、少し紹介したい。

このときは、嶺北地域を含む高知市中央部の市町村を対象とした会であり、報告事例は昨年のKAP助成事業「お山の手作り市」を主催した、本山町の団体「まちかつ」の土地正人さんにしていただいた。「お山の手作り市」は本山町の商店街や旅館、寺院など地域資源を会場にうまく活用し、ライブやワークショップ、飲食の屋台、手作りの小物などの販売などのイベントであった。報告によると、本山町はかつて行商人が行き交うことで、様々な文化が交流する地であったという。その象徴的な存在が高知屋旅館。そこを会場に、あえて町外からの手作りの小物を扱う方を集めて、いわゆる「マルシェ」を開いたのは、そういう歴史的背景を意識してのことだといふ。まさに、地域の歴史という何物にも替え難い資源を十全に活用したといえる。事業報告だけでなく、運営体制についても報告してもらった。あくまでも主催は「まちかつ」という民間団体だが、本山町も協力的であったという。話し合いに、町職員が「一個人」の立場で当初から関わってくれたことがよかったとも。それは、単に人役が増える等ではなく、町との

つなぎや申請書などでアドバイスももらったりし、強力な助っ人になるからである。

この報告を受けて、その後のフリートークでは、「文化事業への自治体の関わり方」が自然とテーマのようになり、非常に活発な意見交換がなされた。「表向きは民間がやりゆうみたいたかたちやけど、実は自治体の負担が大きい」「個人がやりゆうイベントに自治体はどう関わったらいいか悩む」「民間団体がやったほうが長続き

する」など、とてもリアルな意見もあり、市町村の現状が見え隠れする。この種の会では近年稀に見る盛り上がりを見せ、無事に終了。そして、筆者たち主催者側はひとつの仮説をたてた。「自治体は、主体になって事業をするだけでなく、個人や任意団体が行う事業に支援するかたちが、もしかして上手いく？」

新聞を読んでいると、県内各地で様々な文化事業が増えている。仕事柄、「どこで、どんな事業を、だれが」しているかがとても気になる。特に、だれが、が、きちんと統計をとったわけではないが、個人や任意団体が主催、開催する事例が最近では多くなっているのではないかと、という感じがする。何か文化的な事業（イベント）だけでなく、調査研究や出版も含め）を行うことは、その地域に少なからず影響をもたらさざるを得ない。今すぐでなくても。そう考えると、個人が行う文化事業に対して、自治体は何らかのかたちで支援することは大切な意味があると思う。支援というと助成金や補助金などがすぐに思い浮かび、「それはちよつと」となることも理解できるが、支援の形はお金だけではない。事務

処理さえきちんとならば備品を快く（大事な点です）貸してくれる、会議を行う場所を提供してくれる、名義後援、広報協力：経費がほとんどかからずに行ける「支援」はたくさんあるだろう。手探りで事業を行い始めた個人や任意団体が成長し、その活動が定着することで、地域住民が文化に親しむ機会がふえていく……想像するだけでワクワクしてくる。自治体がヨコから手を添える、の意図で「ヨコからの文化政策」と筆者は勝手に名付けた。

もちろん、自治体（が設置した文化施設）にしかできないこともある。世界的な芸術家による展覧会や音楽会、演劇公演などが代表的な例だろう。それもまた大事なことである。なかなか見る機会が少ない公演は、多様な価値観と出会う機会であり、人間の幅を広げてくれる機会ともなるからだ。語弊があることは承知の上だが、便宜上これを「タテからの文化政策」と筆者は勝手に命名した。そして、これからは「タテからヨコへ」を意識しつつも、その両方があるかたちが理想的ではないか、と思う。個人ができることは小さいことだろう。だが、大河の始まりも山

の一滴の雫かもしれない。雫を川につなげ、その川を増やすことで、高知を「文化を通して」豊穡な地にしていきたいと思う。

追伸

ところで、先の市町村文化行政担当者連絡会の全体研修会を十一月六日（金）に須崎市のまちかどギャラリーで開催する予定である。三回目を迎えるアーティストインレジデンス「現代地方譚」の見学とあわせて、運営についてもうかがおうと考えている。市町村担当者はもちろん、地域での文化事業に関心がある方もご参加いただければ、と思う。（要事前申し込み。参加多数の場合は調整。）

かわむら あきよ

一九六八年兵庫県生まれ
一九九三年（公財）高知県文化財団に入団、県立美術館、財団総務部を経て、現在県庁にて研修中。



「コミュニティカレッジ」開校!

尾崎 昭仁

二〇一四年十月、高知県に新しい大学「土佐志民大学」が開校しました。

「大学」とはいつでも特定の校舎を持ち、レポートや試験、単位取得のある皆さんのよく知る大学ではありません。これは、「市民大学」または「コミュニティカレッジ (Community college)」と呼ばれる、その地域に住む市民 (citizen) の「学びの場」を作る取り組みです。

現在「市民大学」は、地域の活性化や人との繋がりがづくり、社会を考える場として全国で広がりが見られ、自分の住むまちを良くしよう、楽しもうとする市民主体の取り組みとして注目を浴び

ています。今年の四月には、全国のコミュニティカレッジ（市民大学）の主催者が一堂に会し、情報共有を行うシンポジウム「Community College Backstage Vol.1 in KOBE」が初めて開催され、各地の取り組みやノウハウの紹介が行われました。日本全国で市民が主体となる「学びの場づくり」が行われているのです。

さて、土佐志民大学は、高知県内で市民活動の支援を行う認定NPO法人NPO高知市民会議と、発起人の一人プロプログラマーイケダハヤトさんが中心となり開校した高知の「コミュニティカレッジ」です。高知で、社会を変えようと日々活動を行っている市民、つま

りNPO活動や市民活動、ボランティア活動を行う「志」を持った市民の学びの場として、様々な先進事例を学んだり、社会的課題について考えたりする講義を実施しています。市民の学びの場でありながら、新たな「志民」を育む場を目指し、「土佐の志を持つ民の大学」と書いて「土佐志民大学」と名づけ開校しました。

行われる講義のスタイルは様々なで、セミナー形式やパネルディスカッション、ワークショップなど、内容や雰囲気に応じて柔軟に変化しています。また、どの講義でも講師が一方的に話をするのではなく、質疑応答の時間を多く設け、講義での気付きや疑問を発信

していただけるよう努めています。ただ単に講義を受け「良かったね」で終わるのではなく、どんな小さなことでも質問をすること、気付きを発信することがより深い学びにつながるかと考えています。

初年度の二〇一四年度は、「〇〇をデザインする」を共通テーマに、NPO代表や企業社長、副市長、映画監督、教育研究所所長な



ど多様な講師陣を迎え、「ボクらの未来をデザインする (十月)」、「共感をデザインする (十二月)」、「ソーシャル時代の働き方をデザインする (二月)」、「生き方をデザインする (三月)」と題した講義を開催しました。計四回の講義に、NPOや企業、行政、主婦、学生など、県内外約二七〇名もの方に参加していただきました。

講義終了後のアンケートでは「高知の人が高知の良さに早く気付くべき (ボクらの未来をデザインする)」、「新しい働き方、新しい生き方の多様性の中で自分が何ができるのか考えるキッカケになりました (ソーシャル時代の働き方をデザインする)」、「夢・志があるだけではコトは進まない事でも夢・志が原動力であることは間違いない (共感をデザインする)」というような感想や気付きを毎回多くいただいています。参加された皆さんの前のめりの姿勢にいつも驚かされています。

講義終了後には、「土佐志民大学・夜学」という名の「飲み会」



を開催しています。もちろん、参加者の自己負担になるのですが、さすが高知県。多い時で四十名近くの方が参加し、講師や参加者の皆さん同士で濃密な「飲み会」(お酒の席でのコミュニケーション)を取っています。面白いもので、所によっては、白熱した議論を交わし、司馬遼太郎の言う「土佐人は議論を肴に酒を飲む」状態になっています。これもまた、高知らしい学びの場の一つだといつも感じています。

第一期である昨年度は、イケダハヤトさんとNPO高知市民会議の理事・事務局が中心となり講義の企画・運営を行ってきました。第二期である二〇一五年度からは、これまでの講義を受講した市民の中から運営側への参画を呼びかけ、数名の方が手を挙げてくれました。少数の参画ではあるものの大きな一歩だと思っています。これまでは、NPO法人のイベントに過ぎなかった土佐志民大学が、この参画により「市民が作る、市民のための大学」へとより近づいたと考えています。今後は、市民の運営委員さんが中心となり、土佐志民大学を作り上げていきます。どのような講義が誕生するのか、いまから楽しみです。

今年度は、「高知の〇〇を学ぶ。」をテーマに、高知で取り組まれている様々な取り組みにフォーカスを当てた講義を予定しています。第一回目を七月十二日に「移住学」と題し開催しました。県内で「移住促進」に取り組むNPOの代表に来ていただきパネルディスカッション形式で、高知の移住につい

て根掘り葉掘り話を伺いました。残り三回、九月・十一月・三月にも同様のテーマのもと講義を予定しています。詳しくはWEBサイト (<http://www.sirinkaiji.com/tsu/>) をご確認ください。あなたも土佐志民大学で学びませんか?



おざき あきひと

一九九一年 高知市生まれ
認定NPO法人NPO高知市
民会議職員。

歌のお話

永原 順子

「いよっ！待ってましたっ！」
今宵もまた楽しい宴の時間が始まります。

約二十年間関西で暮らし、ご縁があつて、こちらに移り住んでから早や七年目。気付いたことが一つあるのです。それは何かと申しますと、高知の皆様は、歌がお上手であること。これはお世辞でも何でもありません。逆にわたくし様な若輩者が申し上げるのが僭越なくらい、お上手でいらつしやいます。

無礼を承知で申し上げます。高知以外の土地でカラオケに参りますと、音かリズムをお外しになる方が一グループにお一人はいらつ

小)が交わされます。そして「お唄」となり、「長生」「四海波」「千秋楽(お納め)」が次々と謡われます。「長生」は謡曲「養老」の一節、「四海波」「千秋楽」は、謡曲「高砂」の一節で、いずれも祝言と呼ばれるたいへんお目出度い謡いです(能の公演では通常締め

の謡いとして謡われます)。以降、公民館長挨拶、謝辞、副館長による乾杯、会計役の方による閉会の辞と続きます。長野の「おさかな」とは違い、盃を交わす部分と謡いの部分は分離されていますが、高知でも、宴と謡いは仲が良かったのだということがわかりました。

そこで連想するのは、結婚式での「高砂」です。少し前までは、仲人や親戚の方が、二人の門出を祝って「高砂や〜」とお謡いになるシーンをよく見かけました。最近、結婚式のあり方も多様化し、謡いが聞かれることも少なくなつてきています。謡いが儀式や宴から離れていったのは結婚式だけでもありません。長野でも高知でも、謡い手が少なくなつてしまい、

しゃるのですが(もちろんその方は楽しんで歌つてらつしやるので、それはそれでよいのだとわたくしもやんややんやと盛り上げます)、高知ではそのようなお方は皆無。「いや、そんな無理無理:」とおつしやる方もマイクをお持ちになると(そんな権限があれば)鐘を全部鳴らしたいくらいの美声なので

これはいったいどういう訳が:と常々思つておりました。いえ、宴会の時から何も考えずめいっばい楽しむのが筋なのですが、いつ何時でも「なんで?」と考えてしまふのが研究者の哀しい性なのであります。

テープを流すというところもあるとか。ある風習が消えていくといふのは、たいへん寂しいのですが致し方ないことだと思つています。特に昨今は目まぐるしく流行りずたりが入り替わる時代ですからなおさらですね。

江戸時代初期僧侶である安楽庵策伝が著した『醒睡笑』は笑話集ともいえるものですが、そこには謡いの文句を使った駄洒落や、謡いのお稽古だと嘘をついて別の場所へ行つてしまふ男の話などが納められていて、謡いが生活に染みこんでいることが読み取れます。今だと「伝統芸能」として、なんとなく近寄りたがたい(！)イメージもありますが、江戸時代では皆が口ずさめるほど謡いは身近な存在だったことがわかります。

お叱りを受けるのを覚悟で申し上げますと、短絡的ではありませんが、ちょうど現代のカラオケにあたるものが謡いだつたのではと考へています。狂言でも、「まあちよつとあなたも謡いなさいよ」「じゃあ自信ないけど一曲だけ:」

話が少し飛びます。能の謡いの伝播・伝承について調べておりました、長野県に伝わる北信流というものに行き当たつたことがあります。これは旧松代藩の地域(長野県北部)に伝わる宴会の儀式で、主に宴の中締めの意味があると言われています。例えば、祭りの直会。祝賀の気持ちを込めて世話役たちの杯に酒が注がれる際に、小謡と呼ばれる謡曲の一節が謡われます。この謡いのことは「おさかな」と呼ばれています。酒の肴という意味でそう呼ばれるのでしよう。小謡も、「大江山」や「狸々」など、お酒に関連のある一節が選ばれています。この慣習の発祥は、学問や芸能が奨励された松代藩で、能楽が盛んに演じられた背景からおこつた武家の儀式であるとされています。

さて。謡いが終わると注がれた方は杯を干します。そして注がれた方の代表が挨拶をし、それが済むと、今度は酒を注いだ側へ杯が返され、また小謡が謡われたあと、お返しに酒が注がれて飲み干す:

というようなシーンが描かれています。カラオケのフロントから電話がかかってきて、今日はもう終わりか:というとき、「締めの一曲は、みんなで歌えて、ちよつといい感じの歌詞のこれかな」という曲を入れて大合唱、になりませんか? 謡いの納めなどで謡われる祝言は、まさにそういう位置づけなのでは、と思うのです。

最初のお話に戻りますが、もともと謡いの文化があつた高知ですから、皆様の歌がお上手なのは当然のこと、となるわけです。もちろん、他の要因もあるでしょう。様々な芸能が豊富に残っていることも無関係ではありません。

内容や形式は変われども、時代を越えて、歌・謡は楽しいものです。皆様の歌に酔いしれながら、今宵も更けてゆくのであります。

そう。もうお気づきですね。まさに献杯・返杯が、信州でも行われているのです。ただし、儀式的なものとして伝わっていますので、雰囲気はちよつとかしこまった感じではあります。そして献杯・返杯は、繰り返されるといふことはなく、一度(もしくは数回)のみのもとなりませう。

山内家は能楽の中でも喜多流を愛好なさつたとうかがつております。高知には、今でも謡いや舞を熱心にお稽古されている方がいらつしやいます。ということは、やはり謡いの文化が残っているのでは:と、地道に調査を重ねていきましたら、さるご縁を頼りに、高知高専のすぐ近くでお話をうかがうことができました。

それは、「年まわりのお祝い」と呼ばれるもの。三十軒ほどの部落において、お正月に、三十三歳の女性、四十一歳(一説に四十二歳)、六十一歳の男性、を皆さんでお祝いする風習です。まずは紅白に飾られた輪を使用した「輪抜け」が行われ、その後「大盃」(大



ながはら じゅんこ

高知工業高等専門学校 総合科
学科 准教授
専門は日本文化論、宗教民俗学。
能楽などの伝統芸能、各地の祭礼、新旧の妖怪文化、等々を通じて、日本人の思想を明らかにすることを目指す。主著主論文に、「能に現れる怨霊」(妖怪文化の伝統と創造)絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで)共著、せりか書房、二〇一〇年)、「擬人化という装置―能に現れる草木霊を中心に」(『アジアの人びとの自然観をたどる』共著、勉誠出版、二〇一三年)など。

続・素人のハチ飼い

成沢 忠

本冊子の五月号（No. 185）

に「素人のハチ飼い」を書いた。日本ミツバチという愛すべき習性の昆虫を飼うことの喜びと苦労を伝えたかったが、もっと詳しい話を読みたいとの声が寄せられたので、再び誌面を汚すことになった。

まずミツバチを飼うことになつたきっかけだが、これはごく単純で、まるで天から降るようには与えられた。横浪半島は景勝の地である。関東から高知に引越してきて、初めて半島を訪れたときには、こんな風光明媚があるだろうかと思つた。ゴルフや海釣りで何度も横浪を訪れているうちに、その一画が格安で売りに出ているのを知った。こんなところに学生を誘ってバーベキューでもやつた

ら楽しかろうと考え、購入した。

しかし、原生林のような敷を前に急には手を出しかねていたら、ある日一隅に不思議な木箱のようなものが置かれていたのを発見した。大豊町に住むN君という知り合いが置いていつてくれた日本ミツバチだった。N君がいうには、何も世話をする必要はない、そのまま放つておけばいい、とのことだ。ハチがせっせと働く姿は、労働の尊さのようなものを感じさせ、ずつと見ていると飽きることがない。蜜を採ろうという気分にもならず、観賞だけを楽しんでたが、たしか二年目の夏に、スズメバチにかなりやられて弱つたところにさらにスムシにも入られて結局全滅してしまつた。このときの喪失感は今でも忘れられない。

日本ミツバチの外敵はいろいろある。トカゲやガマガエルが巣箱の出入り口近くにじつと待ちかまえて、出入りするハチをパクツと食べるシーンを見たことがある。

これはこれで腹立たしいが、この類はダメージが小さく、ハチ群が全滅とまではいかない。大敵はスズメバチとスムシなのだ。スズメバチはミツバチを捕らえて、頑丈なあごで咀嚼し練り餌状にして、幼虫の食糧とするらしい。その攻撃がもっとも激しいのは、幼虫が大きく育つた盛夏、お盆を過ぎたころだ。憎むべきスズメバチも自分の巣に帰れば、何百匹とも知れぬわが子が腹をすかして待っているわけで、自然界の掟は残酷というべきか。撃退法としては、ミツ

一齐に五十度近い高温を発生してスズメバチを焼き殺すという。この特技は日本ミツバチだけが持つ必殺技で、西洋ミツバチにはないらしい。



写真1 スズメバチトラップ

スムシは蛾の一種で、ミツバチの巣と蜜が大好きという困り者だ。どう退治したらいいのか、いまだに全くわからない。ある師匠は、たとえば夏の暑苦しい夜に巣箱の近くを懐中電灯で照らしてみると、驚くほど多数のスムシが巣箱の中に入ろうとして飛び回っている、あれを全部追い払うのは不可能だ、という。ミツバチはスムシに勝てる対抗手段を何か持っていて、ハチ群の勢いが盛んであればスムシが巣箱に入ってきてても簡単に撃退できるのだという。だから、スム

シが多い時期にハチ群が弱ることがないように気を配らばいいのだと。スムシ撃退の手段は不明だが、その攻撃のむごさは見たことがある。スムシはミツバチの巣の中に入り込み、産卵する。時期がきてスムシの卵がかえると、小さな幼虫が無数に巣の中を這い回り回って、蜜と巣を食い荒らす。サナギとなつた幼虫が大きな団子状に固まるころになると、巣はぼろぼろになつて、ミツバチの食糧となる蜜も花粉も全くななくなってしまう。こうなつてから気づいてあわててスムシを駆除してもミツバチ群は回復しない。想像するに、スムシに入られたミツバチは、しばらくの間は絶望的ながら果敢に籠城して戦うが、叶わぬ相手と悟つて無念の落城となるのだろう。素人に飼われた不運だろうが、あわれなことだ。

日本ミツバチの巣箱は、飼い主がベストと思うものを自作するのが普通なので、いろいろなスタイルがあつておもしろい。最初にN君が置いていつた巣箱は太い丸太の内側をくり抜いて、底部に出入り口を設けた素朴な構造で、外観の見栄えもいし、ハチも住みやすそうに思える。しかし、丸太をくり抜く作業は素人には無理だし、また採蜜のときには巣全体を壊すしかなく、ハチにとつては大きな負担となつてしまう。日本ミツバチの巣は天井から下がる格好で、大きい巣だと高さ一メートルにも及ぶ。巣箱の中にはそんな巣葉が何枚もぎつしりつまつていて、巣の上部には保存食としての蜜が、中間部には普段の食糧の花粉が保存され、下部は幼虫を育てる育児室となつている。採蜜では巣の上部だけを取ればきれいな蜜が得られるし、ハチの負担も小さくてすむ。長野県飯田市の師匠が愛用している巣箱は、昔のリング箱を改造して蝶つがいで開閉できる扉を取り付け、その最下部にハチの出入り口を設けたスタイルだ。扉を開けて内部を観察できるからスムシ対策等が容易にできるといふ。しかし、採蜜では巣全体を壊すしかない。長崎県諫早市の師匠は重箱型巣箱を推奨してくれた。三十センチメートル立方くらいの箱を重ねてネジクギでとめる。巣が大きくなるのに合わせて箱の数を三段、四段と増やす。採蜜のときは最上段の箱だけを取り外すと、蜜がぎつしりと詰まつた部分だけが得られ、花粉室や育児室は手つかずで残すことができる（写真2）。



写真2 重箱型巣箱の最上段を取り外し、上下逆にして撮影

他にももっといい巣箱があるかも知れない、スムシを一発で全滅させるテクニクがあるかも知れない、分封群捕獲のもつといい手法を考え付くかも知れない、こんなことを夢みながら素人のハチ飼いは明日も続く。

なるさわ ただし

一九四四年 栃木県大田原市生まれ、高知市在住
趣味として横浪半島で日本ミツバチを飼育中。高知工科大学・名誉教授。

高知市文化振興事業団



「マンガで世界を変えようとした男ラルフ・ステッドマン」
(c) ITCH FILM LTD 2013
公式HP: <http://www.zaziefilms.com/steadman/>
配給: ザジフィルムズ
提供: トランスフォーマー/ザジフィルムズ

「マンガで世界を変えようとした男ラルフ・ステッドマン」上映会

七月十九日(土) かるぽーと小ホールにて、横山隆一記念まんが館としては初の試みとなるドキュメンタリー映画「マンガで世界を変えようとした男ラルフ・ステッドマン」の上映会が開催された。

日本では馴染みの薄くなってきた風刺まんがの世界でも異端児と呼ばれ、「その画、凶暴にして破壊的」と評されるラルフ・ステッドマンの作品からあふれ出す、怒りにも近いエネルギーはどこから生まれるのか。

映画は彼の友人でもあるジョニー・デップがインタビュアーとナレーションを担当。型破りなジャーナリストで生涯の友でもあったハンター・S・トンプソンや作家ウィリアム・バロウズといった友人達との交流を写した貴重な映像や実際の創作現場、アニメーション化された作品が音楽を担当したスラッシュの楽曲に乗って軽やかに流れていく。

穏やかな人柄の中に忍ばせた「人として生きる自由」を踏みにじる社会への怒りと痛烈な批判は、「風刺漫画とは何か」「風刺漫画は社会に何を為し得るか」をも問いかけているようである。

〈入場者数・六十二名〉

6月~8月の事業から

World Music Night vol.19



二〇一五年六月二十五日、かるぽーと小ホールにおいて、ワールドミュージックナイト vol.19 を開催しました。

この公演は市民組織「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」と協働で開催しているコンサートシリーズで、世界の音楽と食べ物を一度に楽しめるというコンセプトで行っています。

今回のメインアクトはアルゼンチンのシンガーソングライター&パーカッショニスト、マリアナ・バラフさんを清野拓巳さん(ギター)、谷中秀治さん(コントラバス)という、日本の実力派ミュージシャンが迎えるユニットで、地元高知からはフラメンコユニットA M A D A S が出演しました。

A M A D A S に廣瀬深雪さんとピアノの山下由紀さんが加わったスペシャルユニットが情熱的で心に響く歌と音楽、そして迫力満点のバイレで会場を盛り上げました。

そして、メインアクトのマリアナ・バラフさんのパーカッションと可憐さと土臭さが共存した歌声はとても個性的で、清野さんのギターと谷中さんのコントラバスが合わさることで、不思議な魅力を感じられる音楽が展開されていきました。

ロビーには、ブラジルの揚げミートパイ、ペルーのエンパナダといった南米料理の他に韓国料理等のアジア系統も交えた国際色豊かな料理やお酒が並び、お客さん達はちよつとした世界旅行気分を味わいながら舌鼓を打っていました。

二十回目となる今回のワールドミュージックナイトは、十一月二十六日(木)かるぽーと小ホールにて開催予定です。

世界の音楽と料理に酔いしれる絶好の機会! 皆様のお越しを心よりお待ちしております。

〈入場者数 一一九名〉

キッズフリーマーケット2015



お金の大切さ、モノの価値、他人とのコミュニケーションを学ぶ場として毎年開催している「キッズフリーマーケット」も、今年で五回目を迎えました。

七月五日(日)の本番当日は午後から雨も止み、会場の高知市文化プラザかるぽーと七階市民ギャラリー第一・第二展示室は、たくさんの子も達で賑わいました。

子ども向け事業を実施するとき、「どこまで教育的側面を演出するのか」ということはとても悩ましく思います。子ども達は大人の押しつけがましい言葉に敏感で、面白い・面白くないという自分の気持ちに正直です。

キッズフリーマーケットの特徴は、本物のお金を使うこと、そして子ども達だけで売り買いすることにあります。さらに、こちらが用意するのは「空間」だけで、どのように参加すればよいかという「姿勢」は子ども達に委ねています。

この点、保護者の方は心配されるところではありますが、しかし同時に最も大切にしたいところでもあります。落し物やお金の計算間違いといった失敗も、子ども達が主体的に動いた結果のことであれば、それは必ず学びにつながるからです。

子ども達が自分で動き、楽しみ、学ぶ、という事業を今後も継続して取り組んでいこうと考えています。

〈入場者数・約七百名〉

第六十五回高知市夏季大学



七月二十七日(月)から八月七日(金)までの土日を除く十日間、かるぽーと大ホールで、鎌田浩毅、片岡鶴太郎、藻谷浩介、綾戸智恵、坪田信貴、保阪正康、小笠原歩、鎌田実、渡部陽一、安藤桃子の各氏を講師にお招きし、第六十五回となる夏季大学を開催しました。

「地方創生」などともに今年の大きなテーマのひとつに「戦後七十年」を掲げ、いくつもの視点から戦争、平和についてより深く考えさせられる、戦後七十年目の夏季大学にふさわしい講演が続きました。ロビーには戦場カメラマン・渡部氏の作品十二点を展示し、戦場の子ども達の声を伝えたいという氏の思いが受講生の胸に迫るようでした。

今年初めての取り組みとして、夏季大学を知らない世代へのPR、また将来の受講生を育てるために、高校生・大学生限定の「トライアル聴講・特別受講票」を設けました。制服姿の高校生がいることで、講師も予定の筋道から若い人達に訴える内容に変更するハプニングもありました。アンケートでも、中高年層から夏季大学に活気を感じてよかった、と好評をいただきました。

新たな受講者層を含めて、会場に足を運んでくださった市民に満足いただけただけで夏季大学になりました。

〈受講者数・九千二百七十九名〉



安夜郎

第6回高知出身まんが家展

展

深夜食堂へいらっしやい



高知県中村市（現・四万十市）出身の安倍夜郎が描く「深夜食堂」。深夜営業の飯屋を舞台に「食」を通じた人間模様を人情たっぷりに描き大好評を博す。本作の魅力、原画を中心に展示紹介いたします。また、安倍夜郎の生まれ育った中村市の風物も紹介。その創作の原点に迫ります。

■横山隆一記念まんが館
9月19日（土）～11月23日（日） 9時～18時
毎週月曜休館（祝日は開館）
一般500円／団体4000円（20名以上）
高校生以下無料
【お問い合わせ】
横山隆一記念まんが館 089・883・5029
高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぽーと内



風伯

フレイル

ち、運動しないと筋力が落ち、筋力が落ちるとますます運動をしなくなるといふ悪循環に陥るケースが多い。まして骨粗鬆で骨折などしたり、病気をしたりするとますます動けなくなる。確かに自ら食べ、行動しなくなることで人は死に近づいていく。

こうしたこと重大なことなのだが、高齢者真っ只中の自分を省みると、最近めっきり「自らただ考える」ということをしなくなりました。本を読んだり、映画を見たりして考えることは「自ら考える」ことには当たらない。そうしたことに触発されて受動的に思いを巡らせているに過ぎない。

なにか、あまりにも情報が多すぎて受け止めるだけでアップアップして終わっている。テレビにしろネット上の情報にしろ、人との会話にしろ、そこに自ら考えるという行為が抜け落ちていく。あくまでこれは自分のことを振り返ると、そういうことになっているということがあるのだ。

（霖）

街ラ祭 知ラ楽 高ラ音



KOCHI MACHI LA-LA-LA MUSIC FESTIVAL
LIVE! LOVE! LIFE!
14th 2015/9/20 [Sunday]

今号の表紙

「彼岸花」

片岡 宏輔

秋というと、銀杏や紅葉などを思い浮かべますが、9月の花というと「彼岸花」だったのでモチーフを選びました。

そして彼岸花の赤色と花言葉の「情熱」が強調されるようなデザインにしました。

（かたおか こうすけ／
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生）



高知を撮る

第31回写真コンテスト入賞作品

村の散髪屋

（昭和37年香美市日ノ御子）

窪田 洋一

昭和の時代、どんな田舎でも散髪屋はあった。又、自分の家で丸刈りの出来る「バリカン」があった。それでも年に1～2回は散髪屋に行った。当時はきちっと白衣を着て仕事をしていたが、最近は私服で髪を切っている。撮影させて戴いたこの散髪屋も今年行って見たが、今はあとかたも無くなっていた。

悩んだら本に聞け

悩んだら本に聞け。これが信条である。大は人生問題、社会問題から、小は生活のノウハウまで。二十年以上前、悩んだすえに煙草をやめた。実は、度外れたヘビースモーカーだった。けむりを吸わない人生は、考えられないほどだった。禁煙断行の自信はなかった。

風俗歳時記



私が感動したのは、同じ本を読んでいたことよりも「悩んだら本に聞け」という文化が国境を越えて共有されていることを知ったからだ。

（本の虫）

高知の演劇推進プログラムvol.2

5つの卵のはなし

脚本・演出・美術：ダリオ・モレッティ / 音楽：カルロ・チャルド・カペツリ / 翻訳：並河咲耶

卵の中身はあなたがもしれない!!

5つ並んだ卵から産まれてきた動物たちが、歌ったり、泣いたり、踊ったり、驚いたり、笑ったり…。
「ぐるぐる」と続いていくおはなしに、大人や子どもも歌ったり、笑ったり…。

世界で活躍するイタリア人演出家ダリオ・モレッティ氏と、地元高知の表現者、
そして高知市文化プラザかるぽーとが連携し制作、お贈りする
大人も子どもも楽しめる人形を使った音楽劇!

2015年
10月11日 
14:00開演 [13:30開場]
高知市文化プラザかるぽーと 小ホール

料金：全席自由
前売り/1,500円 当日/2,000円
*小学生以上は入場券が必要、未就学児入場無料。
(ただし3歳未満は入場不可)

チケットの取り扱い
高知市文化プラザミュージアムショップ…088-883-5052
高新プレイガイド…088-825-4335
高知大丸プレイガイド…088-825-2191
高知県民文化ホール…088-824-5321
高知県立美術館ミュージアムショップ…088-866-8118
ローソンチケット…Lコード:61347

お問い合わせ
 公益財団法人高知市文化振興事業団
電話:088-883-5071 <http://www.bunkaplaza.or.jp>

主催:公益財団法人高知市文化振興事業団 / 助成:一般財団法人地域創造

出演
公募型オーディションで選ばれました!

 **浜田あゆみ**
 **高橋 亮平**


演出
ダリオ・モレッティ Dario Moretti
(テアトロ・インプロヴィザボ)

2013年夏に「3本の手のスケルトン」で来京。これまでに制作した舞台作品は、どれもレパートリーとして世界各国で上演されており、日本でも飯田や沖縄でのフェスティバルを始めとして、各地で公演を行ってきた。高知の郷土に魅せられ、日本で初めて行う滞在制作を非常に楽しみにしている。「5つの卵のはなし」は1995年に上演され好評を得た旧作を、20年経たず、脚本・音楽はそのままだに、日本語版として演出を完全に新しく創りかえる試み。

デザイン:とくひら ようこ